

## 当院における *Bacillus cereus* 菌血症と低濃度糖加アミノ酸輸液の関係

済生会松阪総合病院 薬剤部<sup>1)</sup> 管理栄養課<sup>2)</sup> 内科<sup>3)</sup>

中山智博<sup>1)</sup> 福家洋之<sup>3)</sup> 服部 信<sup>1)</sup> 丸山尚樹<sup>1)</sup> 佐久間隆幸<sup>1)</sup> 松本由紀<sup>2)</sup> 清水敦哉<sup>3)</sup>

### 【目的】

*Bacillus cereus* 菌は自然界に多く分布する好気性芽胞形成グラム陽性杆菌であるが、臨床においては末梢カテーテル関連菌血症の起炎菌として注目されている。菌血症の発症には低濃度糖加アミノ酸輸液の関与が報告されており、当院においても 2019 年 3 月より単独投与を推奨した。また 2021 年 5 月より低濃度糖加アミノ酸輸液の 1 キットあたり 24 時間ペースでの投与を禁止し、採用をビタミン B1 含有の 500ml 製剤に統一した。今回当院における *Bacillus cereus* 菌血症と低濃度糖加アミノ酸輸液の関係について報告する。

### 【方法】

対象は、血培 2 セットから *Bacillus cereus* 菌が検出された症例。血培施行前の低濃度糖加アミノ酸輸液投与の有無、投与期間、投与ペース、投与経路、他剤の混注の有無について、対策前（2015 年 1 月～2021 年 4 月）と対策後（2021 年 5 月～2024 年 10 月）で検討した。

### 【結果】

対策前の対象症例は 30 例（男性 37%）。全例で低濃度糖加アミノ酸輸液の投与がありビタミン B1 含有 1000ml 製剤が 83%、ビタミン B1 非含有 500ml 製剤が 17% であった。投与期間の中央値は 5 日、全例で 24 時間連続投与が行われていた（含 24 時間ペース投与）。投与経路は末梢静脈 80%、PICC10%、CV ポート 10%、混注は 60% の症例で行われていた。対策後の対象症例は 3 例（男性 100%）、全例で B1 含有 500ml 製剤の投与があった。投与期間の中央値は 6 日、全例で 24 時間連続投与が行われていた。（24 時間ペースでの投与は認めなかった）。投与経路は末梢静脈 33%、PICC67%、混注は 33% の症例で行われていた。

### 【結論】

低濃度糖加アミノ酸輸液をビタミン B1 含有製剤に変更し、1 キットあたり 24 時間ペースでの投与を中止することで *Bacillus cereus* 菌血症は減少した。しかし菌血症発症症例はいずれも同製剤の投与が行われおり今後も注意が必要である。